

関中央ロータリークラブ

国際ロータリー第2630地区 東海北陸道グループ



2025～2026年度 関中央ロータリークラブ 会長テーマ

「自利利他 自らを研鑽し

社会に貢献するロータリー」

例会日：毎週木曜日 18時30分

例会場：関観光ホテル 岐阜県関市池尻 91-2

会長：吉田 和也

副会長：高井 良祐

幹事：森 敬

会報：古田 育則

事務局：岐阜県関市下有知 1655-1 山田ビル 1-D

TEL <0575>24-7332 FAX<0575>23-5278

前例会の記録 第 2205回

2026年 3月5日

「本年度インターアクト

事業報告と反省」

場 所 関観光ホテル

担 当 青少年育成

本日のプログラム 第 2206回例会 2026年3月12日

卓話「スポーツ記事の読み方」 担 当：会長・幹事

国歌斉唱「君が代」斉唱…①

ロータリーソング「我等の生業」斉唱…⑨

*会長あいさつ 吉田和也 会長



本日のお客様を紹介させていただきます。岐阜新聞・岐阜放送 中濃総局長 舌間 隆博様です。後ほど「スポーツの新しい見方」というテーマで卓話をいただきます。私はゴルフが趣味ですのでゴルフ番組はよく見ます

が、寝室でお酒を飲みながら見ていると、ゴルフは単調

なのか、知らない間に朝になってしまっております。今回舌間様のマスコミの目線から見たお話を聞かせていただき、違う角度からスポーツ観戦する面白さを教えていただけたらと思いますので、本日の卓話、楽しみにしておりますのでどうか宜しく願い申し上げます。

話は変わりますが、先日の月曜日、某信用金庫の講演会に参加してきました。会員のみなさまのなかでもご参加された方もお見えかと思いますが「人は話し方が9割」の著者で人材育成会社代表の永松茂久氏がお話されました。舌間様におかれましては、次の日に県内総合の紙面で結構な文字数で非常に良い記事を掲載されてみえて、私も拝見させていただきました。

実はこの永松茂久氏は私大ファンでして、本屋に行く

となぜか彼の書いた本が目にとまり、今現在 10 冊ほど読ませていただいております、当日の講演をとても楽しみにして聞かせていただきました。わずか 3 坪のたこ焼き屋の行商からご商売をはじめられ、その後勢いそのまま開店されたダイニング「陽なた家」は、紆余曲折の後、彼の従業員を一番に大切に、縁あるお客様を大切に喜んでいただくために他ではやらないことを一生懸命行うといった経営方針で口コミだけで県外から毎年万人を集める大繁盛店に育て上げ、現在は飲食業を後継者にすべて任せ、本の執筆、人材育成、出版コンサルティングなどの事業を行われております。

やはり、想像していた以上に講演の内容はとても良いものでした。彼の実体験の、成功するためには「夢型」と「縁型」があり、一番身近な縁であるスタッフを大切に、目の前の人に喜んでもらえることを一生懸命考えて行動すると自然と縁が広がって行って、尊敬する師匠さんにも出会え、執筆の仕事を紹介され、講演を行うようになったという、彼の経験談のなどの、本に書かれていた内容の話が、なんととっても、著者自らの生の言葉で聞いたことがとてもよく理解ができて、腑に落ちた感じで感動いたしました。

そんなお話の中で、特に気をつけなければいけないと思ったことは、スタッフ、パートナーなど誰が相手でも、笑顔でうなずいて肯定的なことを言い、まずは人の話を聞き、相手の話を聞きだして、笑顔でうなずいて、いいね、と言いつつ否定のない空間をつくるのが、人が育ちスタッフが元気になりコミュニケーションうまく方法とお話されました。これは、恥ずかしいところ、私が大変苦手としていたところで、人と話していると、ついつい悪気はないのですが「それは違うだろう」と相手の話も聞かずに、すぐに正論で返してしまうことがよくあり、そんな答えは求めていないと、しょっちゅう妻とケンカすることもありますので、この先誰とでもうまくコミュニケーションが取れるように、笑顔でうなずいて、いいねと言えるように、注意して行きたいと思っております。

*本日のプログラム

岐阜新聞社・岐阜放送 中濃総局長 舌間隆博 様
卓話「スポーツ記事の読み方」



まずは、自己紹介をさせていただきます。

大垣出身昭和53年生まれの47歳です。舌間という苗字非常に珍しいと思うのですが、これは大垣の苗字ではなくて、九州の福岡県にちらほらある苗字

です。岐阜新聞は2002年に入社しまして、ずっと報道部にいます。報道部のキャリアとしては、20年くらい前に中濃総局の記者として赴任していました。その後、色々ためぐりめぐりまして、昨年10月に総局長になりました。

新聞記事の分類というのがありまして、政治経済、社会、地方というところは、特に岐阜新聞が力を入れているところで、関市や岐阜市内の記事、後は、運動と文化というカテゴリーがありますが、私は、大体まんべんなく経験して来ました。その中で、スポーツ担当の頃、サッカーでは、今はJ3、Jリーグ3部リーグでやっていますが、2008年は、当時まだ2部制で岐阜県の歴史上初のプロスポーツチームという事で、地域リーグから JFL というリーグにあがって、J リーグ FC 岐阜が誕生しました。2007年には大垣日大が選抜高校野球で準優勝したり、去年は県岐阜がベストフォーになったり、この20年くらいで岐阜県勢が甲子園で一番活躍した時代です。岐阜新聞ですので、岐阜県のチームを取材するのですが、あの甲子園の決勝取材をするという事は、ほぼ半世紀ぶりです。前回どうだったかを参考にして新聞を作るのですが、前回は全く参考にならなくて、1 から紙面作りをするという大変エキサイティングな経験でした。また、オリンピックの取材もしました。

スポーツ記事の読み方という事で、スポーツ面に何が書いてあるかという、4つのカテゴリーがあります。

本記・・・大会名とか試合の概要、次の試合はいつか等
結果・・・スコアーなど結果

囲み・・・ストーリー

雑感・・・現場や当事者の表情、状況を伝える

そもそもスポーツは、何か言いますと、同じルールのもとで、チームもしくは個人で、結果や成果を競い合って勝ち負けが決まる。当たり前ですけど、これがスポーツなのです。これをひるがえって考えてみますと、同じ法律の下で、会社もしくは、社員が、売り上げや利益を競って勝ち負けがきまる。これは経営なのです。そうゆうところで、スポーツと経営はものすごく共通点があるなど気がついたのが、私が西濃支社にいた時でした。西濃支社では、経済関係をまわっておりまして。西濃運輸や大垣共立銀行や太平洋工業等の経営者さんには共通点がありまして、皆さんスポーツ観戦が大好きな方達でした。自分でスポーツやるわけではなく、見てやんや言うのが本当に好きな方が多いです。取材に行っても、すぐにスポーツの話になり、今年ソフトボールは皆調子が悪いとか、FC 岐阜は調子が悪いなどと語る姿を見て、なぜだろうと考えました。その結果、経営者、特にトップの人達は、自分の役割を“監督”になぞられて捉えているのではないか、という結論にいたりました。囲みとか、雑感などを読みますと色んな名言が出てきます。いくつか紹介したいと思います。

「小さなことを重ねることが、とんでもないところに行くただひとつの道だ」 イチロー

「勝ちに不思議の勝ちあり、
負けに不思議の負けなし」野村克也

「良いチームは信頼で成り立ち、偉大なチームは
自己犠牲で成り立つ」 NBA フィル・ジャクソン
「私は人生で何度も何度も失敗してきた。

だから成功したんだ」 マイケル・ジョーダン
「負け続けたものだけが勝者になれる」

プロゴルファー サヒス・ティーガラ
こういう名言がスポーツにはたくさん出てきます。スポーツ記事を読むとどうなのかと言いますと、組織論とは、チーム一丸にして、ひとつの目標に向かわせる、そして勝ち負けを競っている監督は一体何を語りかけているのか、まだ逆に勝てないチームの監督はなにを語っているのかが分かります。次に、挑戦とは、失敗とは、という、“とは”について結構深く考えることが出来ます。今WBCで日本が連覇にむけて挑戦しています。まだ結果は誰にも分かりませんが、挑戦する者たち、そして失敗を一末頭の中で怖いなど思いながらも挑戦する選手は、

どうゆう言葉を発するのか、新聞記事にかかれています。これは人生とか、経営に役立てることが出来ることが書かれていると思います。後は、継続する大事さを学べたり、皆さんも日々、経営判断を求められると思うのですが、挑戦するのか、それとも守りに入るのか、そうした指針を常に求められているのではないのでしょうか。スポーツの世界も全く同じで、選手を交代するのも判断、交代させないのも判断です。そして、そのひとつの判断の裏には、必ずストーリーがあります。なぜその決断にいたったのか。そのインサイドストーリーを読み解くことで、経営判断も強化されることもあるかもしれません。さらに大きく言うと、もはや経営論だけじゃなく、人生に必要な事は、結構スポーツに詰まっていると、私はスポーツ取材をしながら考えていました。

少しサディスティックな楽しみかもしれませんが、私が特に面白いと思うのは、失敗談なんです。スポーツ記事というのは、勝った人のコメントよりも、負け続けた人の言葉の方が、はるかに重みがあり、本当に味わい深いです。最近読んだ記事で、考えさせられたのは、ローリングストーン誌の web 版に掲載されていたのですが、ミラノ・コルティナオリンピックの女子フィギュアで金メダルを取ったアメリカの選手の話でした。彼女は、一度華やかなキャリアの途中で突然引退しているんですね。その後、何もせず、ただ友人に誘われてスキーに行ったそうです。雪の上を滑って、風を感じて、彼女はふと、「私、スケート辞めたけど、またやりたいかもしれない」と。そこから復帰を決意しました。もちろん周りは大反対でした。一度引退した選手が勝てる世界ではありません。若さも必要ですし、継続した努力が前提の世界です。が、彼女はコツコツと積み重ねて、ついに世界一になりました。インタビューで「昔の自分に声をかけるとしても、教えることは何もない。あの辛い経験は全部そのまま通ってきて欲しい。それこそが、今の私がここにいる理由だから。過去は何一つ変えたいとは思わない」すごい言葉だと思いました。普通なら、過去の自分に、苦勞をさけてアドバイスしますが、彼女は、つらい体験全部通ってきて欲しいってどうゆう境地なのかと思いました。

そして次に、引退と継承です。スポーツの世界では、毎年起こります。特に監督の交代の時、何を語るのかこの言葉が、深いんです。私はサッカーが好きなので、サッ

カーの話をしますが、マンチェスター・ユナイテッドを黄金時代の導いた、サー・アレックス・ファーガソンは、「監督の仕事は、次の世代が成功できる環境を作る事だ」と言っています。つまり、自分の成功だけでなく、次の世代が成功して初めて、本当の成功だと。経営者もそうですよね。今回引退しました、高木美保さんですが、今回金メダルは取れなかったのですが、スピードスケートのリーグ戦についてお話すると、リーグ戦はずっと継続してやっていますので、勝ったり、負けたり浮き沈みがあります。その中で、調子がいい時は、何を語るのだろう、調子が悪い時、人はどう立て直そうとするのか。なんていう視点で見るとリーグ戦というのは、ドラマが詰まっているなどと思います。他、にリーグ戦は何があるかなと言いますと、私の趣味になってしまいますが、身近なJ3のFC岐阜がありますので、ちょっと注目して欲しいのですが、Jリーグは、J1、J2、J3とその下にJFLというのがあり、地域リーグや都道府県リーグがあります。東海地域は2分割されています。サッカーの魅力は、プロ野球とちがって、勝ち続ければ、上に昇格し、負け続ければ、降格するんです。例えば、草野球チームがあったとして、勝ち続けたらプロ野球に入れるかと言えば入れませんが、サッカーは入れます。逆に、負け続けると降格するので、上に上がるためにギリギリの戦いをしています。出てくる言葉も生々しいです。

そして今年は、特に注目して頂きたいです。サッカー界では、大きな改革が起きていて、これまでは、日本は、春から秋にかけてシーズンを行っていましたが、暑い時期のパフォーマンスの低下などもあり、ヨーロッパと同じ秋から春シーズンに合わせることになりました。そこで、今はつなぎのシーズンとして100年構想リーグという特別な試合が行われています。この試合は、勝っても昇格は無く、負けても降格がない特殊なリーグ戦です。

FC岐阜は去年の夏に、石丸監督に就任されました。とてもやり手の監督でして、既に5試合終わったのですが、4勝1敗とFC岐阜史上あり得ない好成績です。8月に本戦が始まりますが、ちょっと期待できるんじゃないか？と見えています。試合は、1ヶ月に4回あります。そのうち2回はホームで、長良川競技場で行いますので、お子様、お孫さんを連れて競技場で生のサッカーを見に行くといいですね。そして次の日に岐阜新聞で監

督のコメントを読んでもらうと、あの交代は、こういう意図だったのかとか、こういう考えで戦っているのかと、インサイドストーリーを追っていくと、スポーツが単なる勝ち負けではなく、自分の人生や経営判断に活かせる学びになるのかなと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

*出席委員会

会員数 26 名、本日の出席 11 名です。

*ニコボックス委員会

11 イントのご投函ありがとうございました。

*その他の委員会報告

*幹事報告

<次例会の案内>

第 2207 回 3 月 26 日 (木)

「C.A 会長エレクト研修セミナー報告」

担当:次期会長・幹事